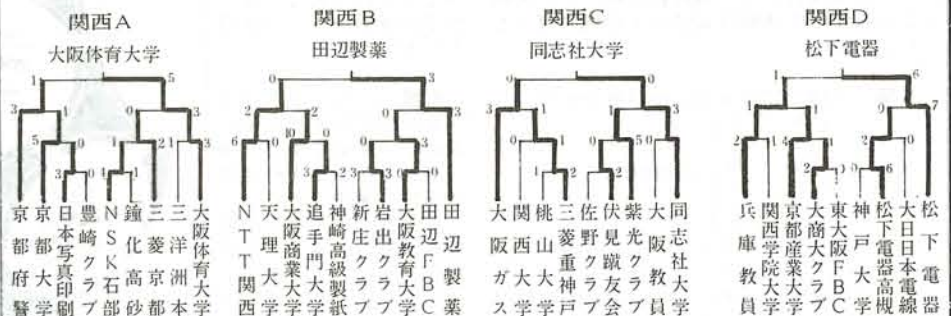




60年度神戸市少年リーグ1部 千歳A3年連続V 女子は多井畑圧勝

昭和60年度神戸市少年リーグ上位リーグは12月30日、神戸中央球技場での1部決勝戦、3位決定戦で幕を閉じ1部～5部の表彰式が行われた。4月14日、ユニバーシアードのメイン会場となった神戸総合運動公園陸上競技場で記念に残る開会式が盛大に行われ、10か月に及ぶリーグ戦の火ぶたを切ったが、この日、栄光の優勝盾と神戸新聞より寄贈の優勝旗を手にしたのは1部（男子6年生以下）と2部（同）が千歳SC、3部（男子4年生以下）と4部（女子6年生以下）5部（女子4年生以下）が多井畑SCだった。

第65回天皇杯の前座試合として行われた1部決勝は3連覇を狙う千歳Aと今年こそ初優勝をと意気上がる多井畑Aの昨年と同じ顔合わせとなった。多井畑が押し気味で進めたもののねばる千歳に追いつかれ、延長、PK戦の末千歳の幸運がおとづれた。千歳は3年連続3回目の栄光である。

今年度の少年リーグは参加チーム184。登録選手は3600人を越え過去最高となった。年々少年サッカー人口は増えており、このリーグの果たす役割は多大なものがある。

〈1部〉決勝 12月30日、神戸中央

	0-1	
	1-0	
千歳A 1	延長	1 多井畑A
	0-0	
	4PK3	

1組では神戸FC・Aが序盤戦で千歳Aを破り決勝戦進出の最右翼と思われたが終盤に入り神陵台A、高倉台Aに敗れ混戦となった。神戸FC、千歳、神陵台が1試合ごとで順位がかわる激戦の中、最終日に抜け出したのは千歳だった。神陵台と勝ち点で並んだが得失点差で千歳がリードした。

2組も、多井畑A、東舞子A、東灘A、鈴蘭台Aが決勝進出に絡んだが、結果的には多井畑が東舞子を勝ち点1差で押さえた。

決勝戦はあいにくの小雨模様の中行われたが神戸中央のグラウンドコンディションを崩すには至らなかった。多井畑は須磨谷、砂山らがゲームを作り、CF三輪も絡め中盤でうまくボールをつなぎチャンスをつくるがシュートがまずく点に結びつかない。しかし、待望の先取点は前半17分に生まれた。左サイドに振った大きなパスを砂山が一気にトラップで縦へ抜きセンターリング、中で待つ原田に見事に合って押し込んだ。後半も多井畑が主導権を握りこのまま逃げ切るかと思われた。ねばる千歳は後半12分多井畑の攻撃をカットし逆襲。吉田がよく周りを見てスルーパスを山本に送った。これを落ち着いて決め同点に追いついた。試合は延長に入り両者決定的な場面も見られたものの得点できず終了の笛が鳴った。50分間の激戦をPK戦で決めるのはかわいそうだったが幸運の女神は千歳に微笑んだ。

千歳は押されながらも最終ラインでよくがんばり2年連続優勝の自信だろうか、勝負どころでチャンスをものにし栄光を手にした。一方多井畑は中盤を支配しながらも決定力に欠け涙をのんだ。決勝戦より両者はつらつとしたプレーで見ている者を楽しませたよいゲームだった。

3位決定戦は神陵台Aが東舞子Aを破り、初の3位を獲得した。神陵台は神戸FCを破るなど今年度の活躍は素晴らしく台風の目となった。

〈2部〉決勝（12月2日、神戸総合サブ）

	0-0	
	0-0	
千歳A 0	延長	0 和田岬A
	0-0	
	0-0	
	3PK2	

1組からは和田岬Aが東舞子Cを勝ち点1で押さえ、また2組からは千歳Cが4勝1分でそれぞれ決勝へ進出した。試合は両者無得点のまま延長に入ったがそれでも決着がつか



△ 神戸新聞社成尾部長から優勝旗を受ける1部優勝の千歳Aチーム

ずPK戦となった。PK戦では3-2で千歳に凱歌が上った。千歳は5年生ながら優勝を果たし来年が期待されるチームである。また、KYI（神戸ユース、インターナショナル）SCは1組で2位に入り大いに健闘した。

〈3部〉決勝（12月22日、御崎少年）

多井畑E 3	3-2	2 神戸FC・D
	0-0	

1組からは最終戦で得失点差で逆転した神戸FC・Dが、2組からは5戦全勝の多井畑Eが決勝へ進出した。今季神戸FCに2敗している多井畑は試合開始から積極的に神戸FCゴールを脅かした。しかし先取点を奪ったのは神戸FCだった。多井畑は再び反撃を開始、12分に同点に追いつき、さらに1分後にはCKから得点して、あっさり逆転した。神戸FCも負けていない。再びすぐ同点に追いつきエキサイティングなゲームとなった。18分に多井畑が再びリードし後半に突入。後半も点の取り合いかと思われたが、ねばる神戸を多井畑がよくふんばり2年連続4回目の優勝を果たした。

1組で最後まで競り合ったひよどり台F、2組で多井畑に惜敗した東灘Cは決勝に進出できなかったが元気がよく楽しみである。

〈4部〉決勝（12月27日、神戸総合サブ）

多井畑	2-0	北五葉
女子A	0-0	女子A

多井畑Aと北五葉Aの対決となった。多井畑Aは1組で全勝、北五葉は4勝1分での決勝進出である。神戸総合運動公園サブで行われたが強風のため思う通りのプレーができなかった。多井畑は立ち上がり北五葉が浮き足立っていたところをうまく攻め先取点を奪った。さらに続けて得点し早くも試合を決定づけた。前半10分を過ぎてから北五葉もようやく試合に慣れ、本来の動きを取り戻したが多井畑の厚い壁を破ることはできなかった。多井畑はライオンズ杯に続いて2冠を果たしクイーンの座を得た。

決勝では敗れたものの、北五葉の活躍は立派で、ひよどり台ともなれば、女子の強豪チームの仲間入りをはたした。

〈5部〉女子小4以下多井畑Cが8勝1分の素晴らしい成績で優勝を決めた。多井畑は6年連続6回目の優勝である。

今年度のチームも元氣のある選手が多く、今後多井畑が神戸の女子サッカーをリードしていきそうだ。（天野）



株式会社 モルテン
広島 / 東京 / 大阪 / 名古屋 / 福岡 / 札幌

日本サッカーにルネサンスは起こるか？(24)

枚方FC 近江 達

個と組織との両立

ボールを離すのはエゴイストでは証拠だからいいけれども、ドリブルのようなボールの独占は「皆でやろう」というチームワークの精神に反するから行わない、というのである。これは授業ばかりでなく、サッカー部でも似たようなものらしい。

そのうちに枚方FCで何人か優秀な個性的選手が育ってきた。だが四面楚歌、進学などでよそのチームに入ると、なかなか使ってもらえない。理由は前記したように、チームにはそれぞれ流儀があり、しきたりどおりにプレーしてもらいたい。枚方FCの選手のようになまじっか自分の判断工夫でプレーされたのでは困るからである。

しかし考えてみると、世界は「チームと個人とは互にあい反する対立したものであってチームはつねに正しく、悪いのはかならず個人だ」と頭から決めこんできたけれども、欧米のチームには、日本人など足もとにも及ばぬ一癖も二癖もある強烈な個性の選手がいろいろいて、日本だと許されないような個人プレーをどんどんやっている。それにそういう選手は、日本人だと組織プレーが苦手なもののだが、彼らはそうではなく、個人技の単なるつなぎ合わせでない立派な組織プレーもやっていた。彼らの間では、個人とチームとは、決してわれわれが白い眼で見ているようにあい反するのではなく立派に両立している。

それだけではない。個人力アップがチーム力アップになるので、チームプレーも個人主義の彼らの方がレベルが高くて、個人プレーを嫌うチームプレー一筋に徹し抜くわれわれの方が低い。だから、何とも皮肉である。

欧米だってサッカーがチームスポーツであることに変わりはない。しかも彼らは本家や大先輩なのだ。してみると彼らが実に要領よくやっているのに、日本人は教条主義だから、「サッカーはチームスポーツ」という「金科玉条」に縛られて、ずいぶん能率の悪いことをやっているのだから、何となく思えない。とはいえこうして個と組織とが日本で両立しなくて、欧米で共存共栄できるというのは、あながち要領だけのせいとも思えない。もちろん彼らの個人主義や自己主張、われわれの集団性といった国民性は大きな要因だろう。だがそれにしても、またいくら文部省に「サッカーはチームワークの教材」と決められているにしても、これだけ大きな相違があるのは、きっと何かほかに理由があるからにちがいない。

頭の隅にこびりついて離れなかったこの疑問は、数年後、縫田清二氏の「イスラエルとユダヤ人」についての次のような談話を讀んだときに氷解した。

縫田 統一形態には二つのタイプがある。一つはピラミッド的統一形態です。何か頂点に象徴なり権力があって、あとのものはそれに右へ揃える。その場合要求されるのは、必ず同質化ということで、極端に言えば、服

装でも何でも同じようにして、それでいっおう秩序が保たれたと納得する。もう一つは、ちょうどオーケストラみたいなもので、楽器がみな違う、それぞれ音色が違うということ、これはもう最初から異質を当然の前提として、どうやったらひとつのハーモニーができるかという統一の仕方です。

いわばユニオン、連合という形ですね。これがユダヤ人のいう統一で、かえってピラミッド的なものを排除する。頂点になるもの、これが一番だといったものは彼らの考え方ではないといってもいいんです。

開高 だけど二十世紀の政治体系ではピラミッド型が幅をきかせてますね。

縫田 面白いことには、ユダヤがいかにピラミッド型人種でないか、という証拠として、その国がピラミッド的統一を強く意識したときには、必ずユダヤ人問題が起ってくる。例のナチスが典型です。

開高 ソビエトもそう。ポーランドもそう。異物、ピラミッドの中のはみ出し石として登場するわけでしょう。

（「砂漠の中の奇跡」縫田清二 開高健対談集「悠々として急げ」昭和52年日本交通公社出版事務局発行）

この対談は国家やキブツ（原始共産主義的集団農場）などの話で直接スポーツは出てこないけれども、この二つの組織原理には間違いなく普遍性があり、サッカーチームにもあてはまる。

日本人の組織はまさしく典型的前者である。天皇という象徴をトップに頂く国家から会社役所学校はむろんのこと、諸団体、スポーツチームにいたるまで圧倒的多数が、軍隊のように頂点の象徴なり権力なりに支配される形態で、統制管理される側は上に服従し組織に隷属する。服装行動などみんな同じでないと安心できず、そうでないものが排斥されるところもそっくりである。

後者は欧米人に多い。とくに白人黒人のサッカーにいたっては、「縫田氏は彼らの説明のためにオーケストラを持ち出したのだろう」と錯覚するくらいそのものズバリである。

個性豊かな選手たちはそれぞれ初めから異質同士であり、弦楽器、管楽器、打楽器など違った楽器奏者のごとく多種多様な個性を充分発揮してプレーする。だが決して自分勝手ではなく、独奏、二重奏、三重奏、あるいは伴奏と、互に他を認め合ってそれぞれの長所を生かし合い短所をカバーし合いながら、全体としてのハーモニーを生み出し、チームの目的である勝利を目指す。

楽譜でいえば、南米はおおむね楽譜なしの即興演奏・欧州は楽譜を使うが臨機応変の変更やアドリブもやるといったところで、まさしくチームはオーケストラであり、ゲームはその演奏そのものと言ってよい。

まとめると次のようになる。欧米で個と組織とが柔盾なく共存共栄できるのは、互に異質を認め合い、生かし合うオーケストラ的チームワークだからである。日本式チームワー

この連載は、雑誌サッカー・ジャーナルに連載されている枚方FCの指導者、近江達氏の随想をサッカー・ジャーナルのご好意で転載しております。

「日本サッカーの発展のためにはルネサンスにも匹敵する人間性の解放が必要である」と、近江氏はいうが……。



△ 昨年のトヨタカップで、写真提供「近江達氏」優勝旗を手にした枚方FCの選手たち

クが組織に始まって組織に終り、組織に忠実な個しか認めず、それ以外の個の存在を許さないのは全員に同質化を要求するピラミッド的統一形態のためである。

異質との協調は苦手

こうして指摘されてみると、あらためてわれわれが同質化欲求のきわめて強い国民であることに気付く。たとえば服装や行動の流行にとても敏感で積極的である。皆と違うと肩身が狭く苦痛を感じる人さえ少なくない。

この欲求は他人にも向けられる。会社学校など団体組織内ではとくにひどい。小中学生によくみられるように、ことの善悪を問わずみんなと同じようにしないと村八分にされかねないから怖い。いわゆる島国根性で、上からやられなくても仲間同士でやるのだから、「同質は味方、異質は敵」というのは国民性らしい。そのせいかどうか、外見や形を揃えたり体裁を整えることが大好きで、その点は外人よりも巧いし速い。

西独の日本人小学校の運動会でマスケゲームをやったところ、すばらしい出来だった。だが、あまりにも秩序整然としすぎていたため、見物にきていたドイツ人たち一彼らも団結好きには定評がある一が感心を通り越して気味悪がったという話があるが、元来われわれは一条乱れぬ団体行動が得意なのである。

コースでも、白人黒人は肝心なところさえ合っていれば、ほかは少々揃いでも気にしない。ただ車にきれいに合わせる揃えというところだけなら、日本人の方がいいくらいである。ただし中身となると、日本のは、こじんまりまとめること自体が目的みたいなところがあり、バイタリティも個性も弱いので、彼らのいきいきとした楽しさとかスケールの大きさ、音楽的感動など劣る。もともとわが国には、さまざまな異質のものが集り、それぞれ個性的に演奏をして、しかもハーモニーを作り出し、多様な音楽的楽しみを味わおうという発想はなかったらしい。（つづく）

モンブランの
メインテーマ

“スピードサッカー”

基本のプレーを徹底的に追求し、機能性を第一に考えたサッカーシューズ

markam® & Libe/o®

親しまれるサッカーウェア **younger®**

リベロメイン06
標準小売価格¥9,800

MONTBLANC
リアルスポーツの追求
モンブラン株式会社
神戸・東京・福岡